

競泳コーチ林葉響子NTR第四話



お口でチョリソー

右手は肉棒アソコに男根

競泳コーチ林葉響子の歴代彼氏たちは

なぜにNTRばかりなのだろう？

第四話

お口でチヨリソー右手は肉棒アソコに男根



大学は夏休みに入り、昼間はライフセーバーのアルバイトが始まった。競泳コーチのアルバイトは土曜日と日曜日が休みだが、ライフセーバーの仕事は土日こそたくさん観光客が来るので、週末を休みにすることはできない。

よって海水浴場がクローズするまでの期間、私が丸一日休みになることはない。

土曜日の夜に彼氏であるモモさんの家にお泊りに行っても、翌朝は5時に起きて海水浴場に向かわねばならないため、ライフセーバーのアルバイトをやっている間はお泊りに行くのはやめている。

それでも平日は毎日モモさんと同じスイミングスクールで顔が見られるので、それほど淋しさは感じていない。エッチが少ないのは元々だし。

スクールが休みの土曜日の夕方、ライフセーバーとしての後片付けをしていると、副隊長である押尾さんが話しかけてきた。

「響子ちゃん、今日もお疲れ様。今夜何人かで僕の友人がやっているバーに飲みに行こうって話になったんだけど、響子ちゃんも一緒にどうかなって思ってた。5年くらいスペインでコックをしていたやつだから、食事もおいしいんだよ。どう？」

押尾さんとはこの夏仲良くするという約束もしていたし、初めて会った時から2週間の間に3回ほど特別に仲良い時間を過ごしていたので、特に断る理由もなかった。

「いいですよ。隊員さんは誰が行くのですか？」

男性3名と女性2名が参加するという飲み会に、私も参加することになった。

モモさんには「7名の飲み会に参加していきます」とSNSでメッセージを送ると、「気を付けて楽しんできてね」と優しさあふれる返信があった。

押尾さんのサーフショップにほど近く、ライフセーバー事務所からも歩いて10分程度の海沿いにあるスペインバルのお店は、とても雰囲気良かったし、長いお米のように見えるが短いパ

スタを魚介の濃厚な出汁で炒め煮たフィデウアというメインディッシュや、衣がカリッと中身はトロトロのイカスミのコロッケはとても美味しかった。甘いサングリアというお酒も大変美味しかった。

楽しく美味しく過ごした後で、押尾さんがもう少し飲もうと言ったが、みんなは明日も速いからと解散になった。

どうしてもあともう少しだけと、押尾さんのお願いを断る事が出来ずに、私はもう一杯だけお付き合いすることにした。

席をテーブルからカウンターに移すと、オーナー店長の秀則さんがシェリー酒を出してくれた。「初めまして、仁から写真を見せてもらって、ぜひ一度お話ししたいと願っていました。今夜はよく来てくれました。これは私からのごあいさつ代わりのおごりです」

私はちょっと驚いて聞き返した。

「え？写真って……何の写真ですか？」

押尾さんが少し慌てて割って入ってきた。

「何の写真で、こないだのライフセービング訓練の時の写真だよ。な？秀則」

秀則さんは少し笑いながら言った。

「ああ、そうそう。そうです。とてもかわいい人だから、ぜひお近づきになりたいと思っていたんです」

「そうですか。こちらこそ、とてもおいしい料理でした」

私は少しだけ引っかかりを感じながらも、シェリー酒を頂いた。

「私はお酒が弱いのであまり飲めませんが、これもおいしいです」

秀則さんは言う。

「スペインのワインのようなもので、そんなに強いお酒ではないので、安心して飲んでください」

秀則さんはチラッと押尾さんを見て、押尾さんは軽くうなずいた。

秀則さんがこれもおごりだと出してくれた、しょっぱめのアンチョビのマリネや生ハムがおいしかったし、シェリー酒がとても飲み心地が良かった。ワインと同じくらいと聞かされていたが、すっかり酔ってしまっている自分に気が付いた。

自分の思考から安全装置のようなブレーキが外れていく感覚がある。気が大きくなるというか

……。

「こんなに可愛い響子ちゃんを彼女に持つ彼氏さんがな、月に2, 3回しかエッチしないなんて考えられるか？ 秀則！」

突然押尾さんが秀則さんに言う。

「ちょ、ちよっと押尾さん。そんな事言わないでくださいよ。さっき会ったばかりの秀則さんに」

「え？ だって響子ちゃん、あの日会ったばかりの僕に不満だって相談してくれたじゃん」

「あの日はほら、酔っていたし……」

「ごめんごめん、今日は僕が酔っているのかな？」

気が付くと他のお客さんがいなくなった店内。秀則さんは入り口に行って「Close」と書いた看板をドアにぶら下げ鍵をかけた。

「俺の親友の仁がこんなに酔うのも珍しい。せっかくだから3人でもう少し飲みますか。響子さんのような可愛い人と飲めるのは、俺も嬉しいし」

秀則さんは私の隣に座ってシェリー酒を飲み始めた。

イケメンには生まれた私は、聞き上手な二人に乘せられて、気が付けばモモさんとのエッチの話をしたり、二人の恋愛事情についての話を聞いたりして盛り上がっていた。

「でもね、でもね、モモさんのキスは本当に優しくて気持ちいいんです！優しいし大好きなんです」

自分でモモさんへの不満を述べて、それに対して二人がモモさんを悪く言うもんだから、私はモモさんをかばう発言をした。

「あ、とっておきのチョリソーがあるんだけど、もう今日は特別に出しちゃおうかな、ちょっと待ってて」

秀則さんは嬉しそうに厨房に入っていた。

「響子ちゃん、キスしてよ。僕のキスは彼氏さんほどうまくないかもしれないけれど、なんか響子ちゃんが彼氏さんのキスを誉めまくっているのを聞いていたら妬けてきちゃた」

秀則さんがいない隙に、押尾さんは私にキスをしてきた。私は秀則さんがいつ戻ってくるかわからない環境にドキドキしながら胸を押し返して唇を離した。

「ダメですって。秀則さんに見られちゃうでしょ？」

それでも押尾さんはもう一度キスをして、今度は舌を私の中に入れてきた。1日働いた疲れと

お酒が私の理性を低くして、私はそれを受け入れてしまっているし、下半身が熱くなる。

「あ、うらやましいなあ」

チヨリソーが並んだお皿を片手に、秀則さんが戻ってきた。

「秀則が僕を羨ましがるなんて初めてじゃない？ 中学からの付き合いだけれど」

「そうだな、今日まで仁を羨ましいと思ったことは一度もないけれど、今は猛烈に羨ましいぞ」

私は顔が熱くなる。

「そんな……。押尾さんもモテるだろうし、秀則さんがうらやむことだってあったんじゃないですか？」

「ないよ、ない。仁の女や生活を羨ましいと思ったことなんて一度もない。今が初めてだよ。こんなカワイイ響子さんとキスができるなんて、本当に羨ましい！」

秀則さんは私の隣に座った。

「響子さん、これね、とっておきのチョリソーなんだけど、あーんしてみて」

秀則さんはチョリソーをフォークで刺すと、私の口元に突き出した。私は少し照れながらも、口を開けて啜えた。

次の瞬間、チョリソーを私の口から引き抜いて秀則さんがパクっと食べて叫ぶ、

「やった、間接キスだ！さいつこう！！！」

今度は私の後ろから手をまわした押尾さんが、秀則さんの口の中にあったチョリソーを横取りして食べた。

中学生のようなやり取りに、私は大笑いしてしまった。

涙を拭いて目を開けると、今度は秀則さんがチョリソーを口にくわえて私に迫ってきた。またも私は大爆笑しながら、つついっノリでその先端を啜えてしまった。

秀則さんはチョリソーを私の口から引き抜いて、今度は両手で口を押えてもぐもぐと食べ始め

た。彼の悪戯っぽい振る舞いに私はまたも大爆笑。

指で涙を拭きながらおいしそうにモグモグしている秀則さんに目をやると、背後から押尾さんが私の耳たぶを口に含んだ。

「あぁん」

私は思わず声を出してしまった。恥ずかしくなった私は怒った顔で振り向くと、押尾さんが私の唇にキスをしてきた。舌を滑り込ませてチョリソーを食べ損なった私の口の中を泳ぐ押尾さんの舌。

「ううん……」

私は恥ずかしい声を出してしまう。その瞬間、今度は秀則さんが私の耳たぶを舐めてきた。

「はうっ」

すぐに振り向くと、秀則さんの唇が私の唇をふさぐ。あれ、これは……私の下半身は熱くなる

ものを覚えた。モモさんとも違う、濃厚な柔らかなキス。私は目を開いていられずに、眉間にしわを寄せて閉じてしまう。

完全に秀則さんのキスを受け入れた私の身体は、それを拒否することができずに知らぬ間に膝を開いてしまっている。

後ろから首筋を押尾さんが舐める。

「はぁあん」

止められない声と同時に、私の蜜壺からジュワつと愛液が流れ出す。秀則さんのキスに夢中になってしまっている私の背後から、押尾さんが魔法のように私のTシャツをめくりあげたと同時に脱がす。押尾さんの指はブラの隙間から滑り込んで、私の乳首を転がしながら背中にキスをする。

「ふううん」

完全に私のブレーカーが落ちた。私は両腕を秀則さんに回して、積極的なキスに転じる。

押尾さんの魔法によって、私のブラは剥がされる。私は椅子から立ち上がり秀則さんの太ももの上に乗る。

押尾さんは後ろから乳首をもてあそび、デニムパンツのホックを外してヌルヌルになっている私の割れ目を中指で弄ぶ。

秀則さんのキスもどんどん濃厚になり、私の声をふさぐ。気が付くと私は、押尾さんが私のデニムパンツを脱がせやすいように立ち上がっていた。さすがの押尾さんは私の要望をすぐに感知して、するするっと私のパンツと下着を脱がす。

こういう「言わずもがな」な押尾さんとキスがしたくなり、秀則さんから唇を離し、振り向いて押尾さんの唇を探して口づける。



今度は後ろから秀則さんが、私のだらしなく愛液を垂れ流し続けている割れ目に指を差し込む。身体がビクツと震える。押尾さんはキスをしながら、私の乳首を弄ぶ。私は無意識に両脚を少し開く。

秀則さんは私のお尻に両手を置いて、親指で割れ目を開いた。

「いや……あんまり見ないで……恥ずかしいよ」

私が声を上げると、すぐに秀則さんは開かれた私のクレバスに舌を差し込んできた。

「ひゃああん」

押尾さんの両肩に手を置いたまま、のけぞる私。視線を押尾さんに戻すと、押尾さんはキスをしながら自分のズボンのジッパーを下げて、先端から粘度が高い透明な液体が出ている陰茎を出した。

私は待てをしていた犬が「ヨシ！」と言われたように、押尾さんの陰茎を口にむしゃぶりつい

た。

後ろから秀則さんが私の右手をつかんで誘導すると、そこには秀則さんの固くなった肉棒があった。私はそれを握って擦りはじめた。目で見てはいないが、押尾さんのより立派なサイズ感。

心の中でモモさんの方が大きいなと思った瞬間、罪悪感のようなものが心にしみこむ。にもかかわらず右手は秀則さんの肉棒を擦り、口には押尾さんの肉棒を咥えている。

秀則さんが私の秘部を弄りながら言う。

「もしかして今、彼氏のこと思った？急にマン汁が増えてキュツと締まったけれど」

押尾さんの肉棒から口を離して返す。

「思ってないし。そんなことある訳ないでしょ？」

押尾さんに頭を押さえられて、言い訳がましい口が肉棒で封じられる。

不意に耳元で秀則さんがつぶやく。